

令和 7 年度
国立大学法人茨城大学学報



国立大学法人茨城大学

令和 7 年 4 月

【4 月 1 日付 学長・役員等】

学長	太田 寛行
理事・副学長（総括・財務・企画・評価）	佐川 泰弘
理事・副学長（総務・教育）	久留主 泰朗
理事（学術）	金野 満
理事（社会連携・基金運営）	下山田 和司
理事（ダイバーシティ・国際・SDGs）	菊池 あしな
監事	人見 次男
監事	浅見 裕子
副学長（教育改革・広域連携教育）	西川 陽子
副学長（研究・産学官連携）	倉本 繁
副学長（情報統括・セキュリティ）	羽瀧 裕真
副学長（国際連携教育）	池田 庸子
副学長（アドミッション統括）	中村 麻子
学長特別補佐（学内コミュニケーション）	青柳 直子
学長特別補佐（博士人材育成）	武田 茂樹
学長特別補佐（ダイバーシティ推進）	佐藤 裕紀子
学長特別補佐（アジア・オセアニア連携）	葉 侑瑋
学長特別補佐（社会連携・リカレント教育）	高橋 修
学長特別補佐（大学院教育改革）	大久保 武

4 月 4 日 令和 7 年度入学式を挙

4 月 4 日、茨城大学令和 7 年度入学式が、水戸市民会館グロービスホール（大ホール）にて挙行された。学部・学環、大学院、専攻科を合わせて、2,239 名の新入生・編入生が入学した。

入学式後は、「フレッシュマンサクセス（F S）セレモニー」を開催。茨城大学の教育のキーワードである「スチューデントサクセス」について、学長と西川陽子スチューデントサクセスセンター長がプレゼンテーション。さらに、各学部・学環の在学生たちが登壇して新入生にメッセージを送ったほか、スペシャルゲストとして水戸市の高橋靖市長も登場した。

また、初めての試みとして、茨城大学の研究者が大学での学びや学術研究の魅力を伝える「はじめの特別授業」も実施。社会心理学を専門とする人文社会科学野の石井宏典教授が講師を務め、「それぞれの専門性を追求しながら、全体性（自然と人間の営みの全体）を見失うことのない学びの姿勢を」「今日からキャンパスでのフィールドワークが始まります。大学で学ぶことのできる境遇への感

謝を忘れずに、一步を踏み出しましょう」と語りかけた。



【学長式辞】

茨城大学の学部・学環に入学された 1,654 名の学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。茨城大学の教職員と在学生一同、皆さんを心から歓迎いたします。そして、これまで皆さんを支えてこられた、ご家族の皆様方にも心からお祝い申し上げます。

今日から始まる大学生活は、皆さんにとって新たな挑戦と成長の場です。茨城大学では、皆さん一人ひとりが自分らしく成功できる環境を整えています。知識を深めるだけでなく、自分の可能性を広げることを意識し、積極的に学び、多くのことに挑戦してください。

茨城大学は、国連が 2015 年に SDGs を採択する前から、「サステナビリティ学をつくる」を掲

げて、その分野の教育研究を始動し展開してきました。その実績を土台にして、間近に迫った 2030 年に大学のあるべき姿として、"イバダイ・ビジョン 2030"を掲げ、「自律的でレジリエントな地域が基盤となる持続可能な社会の実現」に貢献することを目指しています。

私たちは、教職員だけでなく学生の意見も聞いて、"イバダイ・ビジョン 2030"を達成するための具体的な 12 のアクションを策定して、一緒に取り組んでいます。新入生の皆さんも、今日からそのビジョンの達成に向かって、一緒に行動する仲間になってください。その意味で、皆さんにお願いしたいのは、専門分野の学力だけでなく、"サステナビリティ"の基本概念や思考を学び、世界を広い視野で捉える力を身に付けることです。本学は、そのために、学問分野を横断して学際的に学べる"プラス・アイ・プログラム"と、キャンパスを飛び出して国内外の人たちと交流できる学外学修の"インターンシップ・オブキャンパス・プログラム"、iOP を提供しています。是非、積極的に挑戦してください。

もう一つ期待することは、大学での学びや活動、そして交流を通して、皆さん一人ひとりが「なりたい自分」に向かうことです。自分の強みや自分の価値観を活かしながら成長することです。この「なりたい自分になる」ことを、私たちは「スチューデント・サクセス」と呼んでいます。みんな同じではなく、個性豊かに成長することが、多様性を包摂する社会づくりに貢献し、現代社会の課題解決に結びつくと、私たちは考えています。

今、私たちの社会は、経済・技術が成長し、人口が増加していた時代から、経済・技術の低迷と人口減少の時代に移りました。私たちは、その時代の移り変わりに対応できずに、多くの課題を抱えています。私が考える一番大きな問題は、私たちの脳や感覚が、経済成長と人口増加の時代のままであることです。そのひとつが、能力成果主義、いわゆるメリトクラシーです。すなわち、客観的な「成果」や「業績」にあらわれる能力を、その人の価値と捉え、称賛する考えです。その根底には、「努力と才能があれば何にでもなれる」、「能力を高め、成果を出す機会は平等にある」というアメリカンドリームのような素朴な能力観があるといえます。

皆さんは、「何かを成し遂げた人は、努力と才能の証」、「何かを成し遂げなかった人は、努力と才能の欠如」という感覚や考え方に疑問を持ったことはありませんか？ 「疑問」とまでは言わないまでも、何か「違和感」を感じたことはありませんか？ その疑問や違和感の根本にあるものとして、政治哲学者のジョン・ロールズは次のように看破しました。

「才能や資質も、生まれ、容姿、人種などと同じで、本人に選べるものではないのだから、『成果』で人の価値を計るようなことはすべきではない」。

そして、アメリカンドリームの結果である、貧困と格差の固定の問題にメスを入れるかのように、「実力も運のうち 能力主義は正義か？」の著作で知られる マイケル・サンデルも、「能力成果主義は、不平等の解決ではなく、不平等の正当化である」と見抜きました。

私が、先に述べた「なりたい自分」は、測定可能な成果や能力で捉えるものではありません。なので、みんな同じではなく、周囲を気にせず個性豊かに成長して欲しいのです。

ひとつ気がかりなことがあります。翻訳家でエッセイストである鴻巣友季子さんが指摘するように、私たちは、メリトクラシーからなかなか脱せないことに加えて、現代社会は情報過剰社会であり、いわゆる"アテンション・エコノミー"が急速に広がっていることです。私たちの多くは、「内容の正しさ」よりも「人々の関心・注目」に経済的価値があると思い込む妄想を作っています。そのた

め、「いいね！」の数だけが価値をもつ世界で、私たちは、他者と自分と向き合い、対話し、その価値を吟味する時間を失いつつあると思います。

もう一度確認しましょう。大学は、多様な知識、考え方、文化、そして多様な他者と出会い、対話できる場です。そして、その学びと出会いと対話から、単なる共感ではなく、共存を意識できるような他者への理解から、「なりたい自分」を、試練を重ねながら磨く場です。

以上をもって入学式の式辞といたします。

本日は、入学、誠におめでとうございます。

令和7年4月4日
茨城大学長 太田寛行

3月25日～4月4日 茨城大学が水戸市の中心市街地へアウトリーチ！「まちのイバダイ」

3月25日～4月4日の11日間を、茨城大学水戸市街地アウトリーチ週間「まちのイバダイ」と題し、水戸市民会館や商店街の施設などで、地域の方々と楽しむイベントを連続的に展開した。企画運営は教職員だけでなく、水戸市内の企業や団体と協働して行った。

本学は、水戸市民会館で3月25日に卒業式、4月4日に入学式を挙行。卒業式・入学式の両方を同会館で行うのは初めてで、いずれの式典でも約2000人の学生が水戸市中心市街地を訪れることから、両式典をつなぐ期間を「茨城大学と水戸のまちがクロスする11日間」と位置付けた。

工学部で建築デザインを研究する研究室とともに建築物を見て歩く街歩きや、小学生向けの科学体験ワークショップ、江戸時代の料理を再現するイベント、哲学カフェやブックカフェ、政治カフェなど、計13のイベントを開催した。このほか、本学の歴史写真や学生の取り組みの展示、商店街のスピーカーを利用した特別放送などを行った。





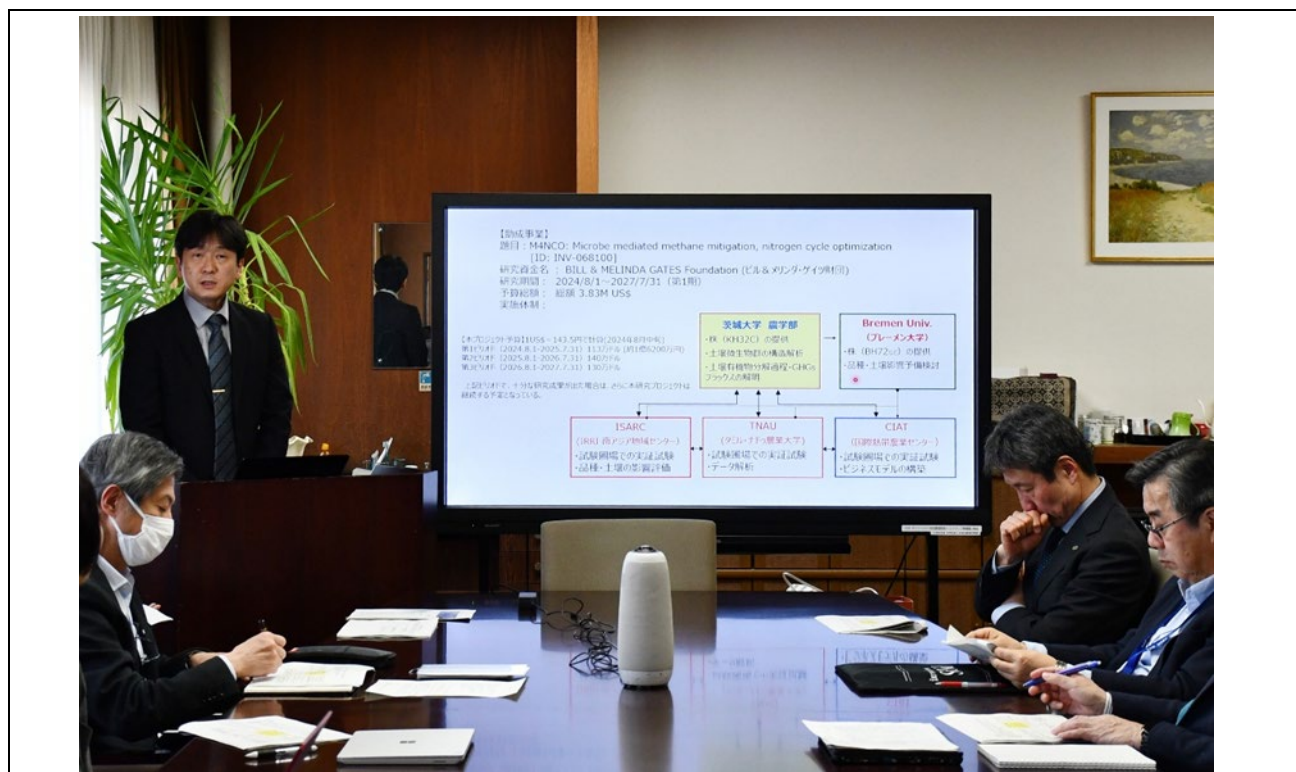
4月1日 大型プロジェクト獲得教員の教育・校務等を免除する「プロジェクト等研究専念制度」の運用開始

本学では、大型の研究プロジェクトや科学研究費助成事業等による研究外部資金を獲得した教員に対し、一定期間、教育や校務などの業務を全て（または一部）免除し、当該プロジェクトに専念させる「茨城大学プロジェクト等研究専念制度」を昨年度制定した。4月1日から5人に適用された。

制度の対象となる大型研究プロジェクト等は、①科学研究費助成事業のうち、特別推進研究、学術変革領域研究(A)、基盤研究(S)、国際先導研究 ②戦略的創造研究推進事業のうち、CREST、ERATO、ALCA-Next、CRONOS ③戦略的イノベーション創造プログラム(SIP) ④その他研究費の直接経費が1事業年度あたり、50,000,000円(複数プロジェクトの合算を含む)以上の研究プロジェクト ⑤その他学長が特に必要と認めた場合。

申請資格を持つのは常勤の教員で、当該プロジェクト等の研究代表者または研究代表者に準ずる者。制度の適用期間は原則として連続する3か月以上2年以下。制度利用を希望する教員は所属学野長へ申請書を提出し、学長が適用の可否を決定する。

4月1日からの適用者は、人文社会科学野の青山和夫教授、応用理工学野の小峰啓史准教授、応用生物学野の西原宏史教授、長南茂教授、西澤智康教授の5人であった。



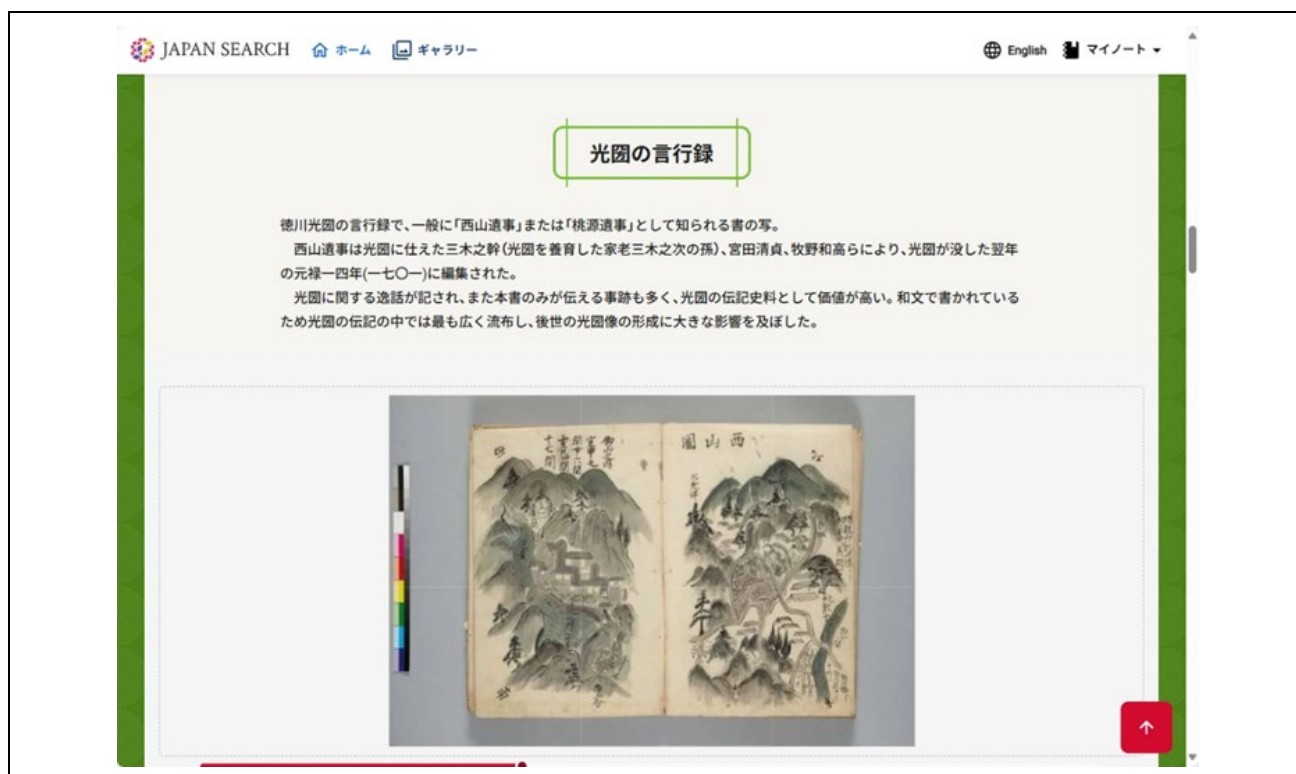
4月 図書館がジャパンサーチでギャラリー「光圀と斉昭」を公開

水戸キャンパス図書館本館は、2024 年秋に開催した企画展「光圀と斉昭」の電子展示ページを、国立国会図書館が運用するデジタルアーカイブポータルであるジャパンサーチの「ギャラリー」として作成し、2025 年 4 月から公開した。

図書館では、所蔵する貴重資料のうち特に希少性の高いものや企画展で展示したものを中心に電子化し、国際的なデジタルアーカイブの画像公開規格 IIIF にも対応するデジタルアーカイブを構築している。さらに日本国内の幅広い分野のデジタルアーカイブを連携し多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォームであるジャパンサーチにも登録し、広く公開を行ってきた。今回は、特定の切り口でコンテンツを集約して紹介できるジャパンサーチの「ギャラリー」ページを活用した企画展の電子的な再現の試みの端緒として、2024 年秋に開催し好評を得た企画展「光圀と斉昭」のギャラリーを作成した。

一般に「西山遺事」または「桃源遺事」として知られる徳川光圀の言行録や、徳川斉昭から儒学者の佐藤一斎に宛てた弘道館の指針について相談する書簡など、図書館が所蔵する展示資料の高精細画像を閲覧することができ、企画展の雰囲気を楽しむことができるページとなっている。

ジャパンサーチの「ギャラリー」トップページでも「特色あるギャラリー」としてピックアップされているほか、ジャパンサーチ連携機関ニュース（JPS ニュース）でも「魅力あるギャラリー」として取り上げられた。



4月9日 グリーンバイオテクノロジー研究センター（Gtech）の開所式を実施

茨城大学グリーンバイオテクノロジー研究センター（通称「Gtech（ジーテック）」）が4月1日に開設されたことを記念した式典が、4月9日、阿見キャンパスで開かれた。

Gtech は、不耕起栽培などの環境保全に関わる農法や、温室効果ガスの抑制につながるような土壌微生物のコントロールについての研究・社会実装により、持続可能な農業の実現と気候変動の緩和を目指す研究組織。「農業・生態系保全ユニット」「微生物遺伝子情報解析ユニット」「社会共創ユニット」の3つのユニットで構成され、農学部（応用生物学野）のほか理学部（基礎自然科学野）や工学部（応用理工学野）などから、計21名の研究者がメンバーとして名を連ねている。

冒頭、挨拶に立った太田寛行学長は、自身も滞在していたことがあるオランダのローダムステッドの農業試験場の歴史に触れ、「1843年、世界で化学肥料を使い始めたところに圃場試験を始めて現在まで180年以上にわたるデータをもっている、世界遺産レベルの場所。そこから土壌微生物への探究も始まった。Gtech もそういうセンターになってほしい」と思いを述べた。



式典には、阿見町農業振興課長の浅野裕治氏と JA 全農いばらき副本部長の鈴木正寿氏が来賓として出席した。

来賓挨拶後は小松崎センター長が Gtech の概要について説明。「農業は環境にネガティブなインパクトを与える産業という印象がもたれているが、茨城大学内の G L E C や C R E R C（カーボンリサイクルエネルギー研究センター）、R E C A S（原子科学研究教育機関）と連携することで、農業生態系における緩和について研究していきたい」と意気込みを述べた。



4月25日 大学の取り組みを紹介する「いばPステーション」オープン

水戸キャンパス事務局棟1階に、大学の歴史や取り組みを紹介するミニ広報&交流スペース「いばPステーション」が登場した。入試広報キャラクター「いばP」が展示物をガイドする。世界ペンギンの日である4月25日にオープンした。

いばPステーションには、大学の沿革や創立時の新聞「いはらき」の複製紙面などを展示。周年史も閲覧できる。地域の期待と応援のもと創設された同大の歴史に触れることができる。ほかに、最近の取り組みを紹介するパネルやポスターも展示。また、東アジア・東南アジアの協定校などから謹呈された記念品を陳列したガラスケースも設置した。展示内容は柔軟に変更していく予定。

スペース内には、テーブルと椅子もあり、教職員の休憩や簡単な打合せなどで利用可能。来場記念の「いばP」スタンプと、スタンプ台紙を兼ねたリーフレットも用意した。

オープン日には、太田寛行学長を含む関係者が「いばPステーション」へ駆け付け、記念撮影を行った。さっそくお客様を連れて案内する教職員の姿も見られた。



令和 7 年 5 月

5 月 16 日 教育学部附属小学校×農学部 乾田直播の稲作に挑戦

教育学部附属小学校では、乾いた田んぼに種もみを直接播く「乾田直播」でお米を作る取り組みがスタートした。5 月 16 日、農学部の協力で、3 年生約 100 人が校内の田んぼに種をまいた。



高台に位置する附属小の校舍脇の田んぼには河川から水を引くことができないため、数年前まで水道水で稲作体験を行っていたが、費用がかさむことなどから最近と同体験を休止していた。

一方で、教諭たちは稲作体験の学習価値を感じていたことから、新たな形での稲作を模索。3 月まで農学部で教鞭を執っていた黒田久雄名誉教授と、応用生物学野の林暁嵐助教が乾田直播の研究をしていることを知り、附属小から協力を依頼したところ取り組みが実現した。



黒田名誉教授と林助教によれば、乾田直播の場合、お米の花が咲く時期から穂が出るまでは水が必要であるが、それ以外は基本的に水やりが不要だという。研究段階だが、うまくいけば10月頃に収穫できる見込み。林助教は「イメージする田んぼとは違うと思いますが、固定観念にとらわれず、技術の面白さを感じて欲しい」と話した。

様子を見に来た石津美代子副校長は「成功しても失敗しても学びにつながる」とにこやか。「今お米が高いと言われますがこれだけ手間暇がかかっている中で本当に高いと言えるのか、他の教科の学びにも応用できると思います」と述べた。



体験を終え、鈴木り帆さんは「水がなくてもお米できるんだ！っていうのと、種が赤くてびっくりした。お米を作るのは大変だと思った。すくすく元気に、おいしいお米に育ってほしい」とわくわくした様子だった。

令和7年6月

6月4日 RECAS とみらい創造インベストメンツが包括連携協定を締結

原子科学研究教育センター（RECAS）と、株式会社みらい創造インベストメンツは、6月4日、原子力分野における人材育成及びスタートアップ創出に関する包括連携協定を締結した。

みらい創造インベストメンツは、研究開発型スタートアップへ投資し、技術を社会実装することにより良い未来を目指すベンチャーキャピタル。RECAS メンバーでもある応用理工学野の田中伸厚教授が取り組む「原子力発電所廃炉プロセスの高度化及び除染・炉心解体技術の改良に資するデジタルツイン技術の概念検証」の GTIE GAP ファンドプログラムの採択に際し、事業化支援機関として伴走支援をしている。また、執行役員の高橋遼平氏は茨城大学特命教授として、研究成果を活用したスタートアップ創出や事業化に向けたアドバイスをを行っている。

今回の協定は、茨城大学 RECAS とみらい創造インベストメンツが相互に協力し、グローバル市場をターゲットとした原子力分野の大学発スタートアップの創出を促進し、原子力分野における人材の育成を連動しながら、茨城県内の原子力産業の発展および活性化に寄与することを目的としている。RECAS は廃炉技術・原子力関連新技術の共同研究開発や社会実装の推進、所属する研究者の研究成果および専門性に関する情報提供など、みらい創造インベストメンツは RECAS による研究成果の事業化および研究成果を活用したスタートアップの創出支援、原子力分野におけるグローバルな技術トレンド情報の提供および研究開発テーマの選定支援などを行っていく。

6月11日 外国人留学生 OB・OG と現役留学生の座談会 母校で開催

6月11日、外国人留学生として本学を卒業した OB・OG が母校を訪れ、在学中の現役外国人留学生やかつての恩師と交流する座談会が初めて開催された。

これは本学の留学生同窓会（2013年発足）の構成員である黄磊氏を中心となって企画し、参加を呼びかけたことで実現したもの。当日は対面・オンラインで学内外から20名が参加し、旧交を温めたり情報交換を行ったりした。

開催に先立ち池田庸子グローバルエンゲージメントセンター長は、「コロナ禍によって激減した留学生の受入れ数は、昨年度から回復しつつある。世界をとりまく状況が大きく揺れ動くなか、多くの学生が本学での留学を選択し、成長して社会で活躍していることは喜ばしい。こうした先輩たちの経験談は現役学生にとって大いに参考になるのでは」と挨拶した。

マレーシアからオンラインで参加した卒業生のウサマ・ザイド氏は、「大学でたくさん友達を作らなくては、と気負う必要はない。勉強以外にもアルバイトや普段の生活から得られる学びが多くある」と話し、「留学中の時間を有効に使ってください」と後輩たちへアドバイスを贈った。

中国からオンラインで参加したオウ・スイ氏は、同大を卒業後、日本企業の中国現地法人で経営責任者を務めている。「もともと生産管理の知識を持っていなかった私に現在の地位が務まっているのは、

茨城大学で修めた経営学を土台として、就職後も勉強し続けたから」と語り、在学中に培った学ぶ力が現在につながっていることを強調した。

参加した在学生からは、留学先として同大を選んだ理由や、日本に留学して良かった点などが質問された。会場には、卒業後に日本で就職した卒業生も駆けつけ、「社会人になってから懐かしいキャンパスを訪れて後輩や先生たちと交流する機会があるのは嬉しい。茨城大学は自分にとってふるさとのようなもの」と、参加者同士で名刺交換しながら思い出話に花を咲かせた。



6月27日 グリーンバイオテクノロジー研究センターキックオフシンポジウムを開催

6月27日、阿見キャンパスで、グリーンバイオテクノロジー研究センター（Gtech）のキックオフシンポジウムを開いた。温室効果ガスの排出削減手法開発に取り組む国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）の須藤重人氏と、土壌生態学の先駆者である島根大学客員教授の金子信博氏が基調講演。来賓には、文部科学省研究振興局大学研究基盤整備課の山村満理子学術研究調整官、農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課の坂下誠地球環境対策室長、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）農業環境研究部門の山本勝利所長らを迎えた。

2025年4月に開設したGtechは、不耕起栽培などの環境保全に関わる農法や、温室効果ガスの抑制につながるような土壌微生物のコントロールについての研究・社会実装により、持続可能な農業の実現と気候変動の緩和を目指す研究組織。

基調講演で、須藤氏は「農業生態系における温室効果ガスの動態と排出抑制策」、金子氏は「生態系の健康を支え、環境を再生する新しい農業」をテーマに講演した。パネルディスカッションも行われた。



令和 7 年 7 月

7 月 7 日 いばらき県央地域連携中枢都市圏を形成する 5 市 3 町 1 村と包括連携協定を締結

7 月 7 日、いばらき県央地域連携中枢都市圏を形成する 5 市 3 町 1 村（水戸市、笠間市、ひたちなか市、那珂市、小美玉市、茨城町、大洗町、城里町、東海村）と包括連携協定を締結した。

茨城大学と 9 市町村が協力し、共同研究や人材育成、人的・物的・学術的資源の活用、共同事業の企画・運営などにより、同圏の発展を目指す。

締結式後には、どういった連携にすべきかの意見交換も行われ、「大学の存在感が高まるよう協力したいが、地域として何ができるか」「職員が大学院で学んだりゼミに参加したりできるような仕組みがあるといい」など、活発な議論が交わされた。

太田寛行学長は「学生生活の半分はまちでの暮らし。学生たちがハッピーに、ずっとこのまちに住みたいと思ってもらう。まちや地域に良い思い出を持ち、戻りたいなあと思ってもらう。それは大学だけではできないこと」と協定締結の意義を語った。



4 月 23 日～7 月 9 日 教育学部で 1 年生全員が救命講習を受講

教育学部の 1 年生が全員受講する「大学入門ゼミ」内で、救命講習が実施された。一般社団法人水戸地区救急普及協会の協力で、e-learning と実技で基本的な知識と技術を身に付けた。教職を目指す学生たちが、将来、学校や地域でためらわず救命処置への対応ができるようにするのが目的。同授業内での実施は今年度から。

講習では、意識の有無の確認や、胸骨圧迫、人工呼吸の方法、AED の使用方法などをテキストと実技で学んだ。講習を終えた学生は「言葉だけで説明を受けてもイメージしにくい、実技を行うことで実際の現場をイメージすることができた。応急処置が必要な場に居合わせたら、緊張すると思うが、冷静に、周りと協力しながら対処できると思う」と話した。

同学部はこれまでも、4年生の全員(一部の課程を除く)と、3年生の一部の課程・コースで、一次救命処置に関する講義・実習、AEDを用いた実習に取り組んでいる。



7月10日 阿見キャンパスで教育研究評議会 キャンパス見学や若手研究者による発表も

7月10日、教育研究評議会を阿見キャンパス（農学部）で実施した。会議に先立ち、出席者はキャンパス内を見学。若手研究者による研究発表も行われた。

一行は、応用生物学野の宮口右二教授（農学部長）の案内で研究棟や研究室を巡り、担当教員らから研究について説明を受けた。現在研究開発中のチョコレートの試食や、茨城大学発ベンチャー「株式会社エンドファイト」の取り組みの説明も行われた。

続いて、農学部卒業生である迫田翠助教と林暁嵐助教が、それぞれ「農地由来の温室効果ガス排出を低減した持続可能な作物生産を目指して」と「異なる農法による一酸化二窒素(N_2O)の排出」をテーマに発表した。

本学では、学内コミュニケーションの一環で、同評議会を、本部機能を置く水戸キャンパス以外でも実施してきたが、コロナ禍で中断していた。今回の再開に伴い、キャンパス見学や研究発表を盛り込んだ。





7月11日 付属幼稚園で7年ぶりの夕涼み会

教育学部附属幼稚園は7月11日、園庭で夕涼み会を開催した。園児や保護者に加えて、本学の大学生・大学院生や近隣の中学校の職員なども足を運び、夏の夕べを楽しんだ。

同園の夕涼み会は2018年まで開かれていた記録があるが、その後は休止状態になっていた。復活の機運が高まる中、PTAのメンバーと職員たちが企画内容を一から検討し、7年ぶりの開催にこぎつけた。

夕方5時を周り、保護者と手をつないで園児たちが入場。会場内では保護者のボランティアがわたあめやかき氷、ポップコーンの機械を操作し、縁日さながらの雰囲気となった。また、大学生たちは射的や輪投げ、ヨーヨー釣りなどの遊びゾーンでスタッフを務めた。

PTAからの声かけにより、会場にはキッチンカーや地元のアメフトチームが提供するふわふわのすべり台なども登場。さらに後半の盆踊りでは、水戸市のマスコット「みとちゃん」もお目見えして、「黄門囃子」などの演目を一緒に踊った。

日暮れになりフィナーレが近づくと、園庭に面した附属小学校の校舎の壁に、プロジェクションマッピングによる花火の映像が映し出された。おなじみの場所で、家族や友だちと一緒に眺める即席の花火に、園児たちは歓声を上げていた。



7月15日 茨城県経営者協会水戸地区支部が茨城大学のリカレント教育を体験

7月15日、茨城県経営者協会水戸地区支部主催の社会人リカレント教育プログラム体験見学会が開かれた。会員約30人が参加し、教育プログラムの説明や模擬講座を受講したほか、学内を見学した。

同支部は、企業を取り巻く環境の変化を踏まえ、今後重要となるリカレント教育の活用を探る機会として見学会を企画。同支部長の幡谷史朗茨城トヨタ自動車株式会社代表取締役社長は、「リカレント教育は会社に勤めながらスキルアップできるだけでなく、新たな気づきを促してくれる」と意義を話し、「経営者協会としても今後受講を推進していきたい」と呼び掛けた。見学会には、笹島律夫会長も参加した。

続いて、茨城大学社会連携センターの高橋修センター長がリカレント教育プログラムについて説明。その後、同センターの間中健介講師が「イノベーションスピードの変化と企業に求められる事業変革、その変革を成し遂げるための人材教育について」をテーマに模擬授業を行った。

受講後、一行は移動し、スチューデントサクセスセンター（SSC）と図書館を見学した。



7月21日 マレーシア工科大学との覚書締結

マレーシア工科大学（University of Technology Malaysia）と学術交流に関する覚書を締結した。

2025年7月21日に、大阪・関西万博のマレーシアパビリオンで開催された覚書締結式では、本学の太田寛行学長とマレーシア工科大学のモハド・シャフリ・ビン・モハド・ラヒム（Professor Dr. Mohd Shafry bin Mohd Rahim）副学長による記念品の交換などが行われ、その後に関係者による記念撮影が行われた。

なお、今回の覚書締結式はマレーシア高等教育省（Ministry of Higher Education Malaysia）が開催した高等教育イベントの中で実施された。

今後、茨城大学カーボンリサイクルエネルギー研究センター（CRERC）を中心として、両大学におけるカーボンニュートラルエネルギーに関する研究教育の結びつきを強化していく予定で、CRERCからは田中光太郎センター長と古關恵一教授が出席した。



7月22日 文科省大学振興課の石橋課長を迎えFD・SD兼法人経営人材研修

7月22日、令和7年度教学イノベーション機構FD/SD研修と法人経営人材育成研修会を兼ねて、文部科学省高等教育局大学振興課の石橋晶課長を講師に迎えた研修会を開催した。テーマは「『知の総和』答申を踏まえた高等教育政策の方向性～学修者本位と社会基盤としての大学～」で、本学の教職員だけでなく、茨城キリスト教大学、常磐大学、宇都宮大学、群馬大学、茨城工業高等専門学校といった県内外の大学等や自治体からも参加があり、約260人が石橋氏の講演に耳を傾けた。

講演では、中央教育審議会が今年2月に示した「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～」答申の概要が紹介された。同答申では「新たな質保証・向上システムの構築」として、学部・研究科等に応じた定性的評価の導入など、現在の認証評価制度の見直しについて言及されている。石橋氏は茨城大学における教育評価・質保証の取組みについて、「ディプロマ・ポリシーに照らし合わせて自分がどこまで達成できたかを各学年で確認するという茨城大学の仕組みは、国立大学の中でも貴重。みなさんのやっていることが、中教審答申の土台のひとつになっていると思ってこのまま進めてほしい」と話した。

参加者からは、石橋氏の率直な語りぶりへの賛意などが感想として示された。また質疑応答では「研究体制の強化も求められている中で、個別的なケアも含めた学修者本位の教育のリソースをどのように確保していくべきか」などの質問があり、議論がより深められた。



7月24日 学生が感じる農学部の魅力とは？令和7年度「学長と学生の懇談会 in 農学部」開催

7月24日、阿見キャンパスにて「学長と学生の懇談会 in 農学部」が開催された。太田学長をはじめとする教職員、農学部各学科の2年～4年に所属する11名の学生が阿見キャンパスの会議室に集まり、各々が感じる農学部の魅力について意見が交わされた。

毎年開催されている「学長と学生の懇談会」は、学長や教職員が学生と直接対話をするすることで、今後の大学運営をより良くしていくことを目的としている。昨年度は水戸キャンパスでの開催となっていたが、より多くの学生からの意見に耳を傾けるために、今年度は農学部の所在する阿見キャンパスでも開催することになった。

今回は「あなたが感じる“農学部”の魅力とは？」というテーマが設けられ、大学での学修、阿見キャンパスの施設、キャリア関係など様々な視点から話題が展開された。

続いて、杉本憲子スチューデントサクセスセンター（SSC）スチューデントライフサポート室長の司会の下、学生一人ひとりが農学部の魅力について自由に述べた。

学生からは自身の体験を基に、「留学に対するサポートが充実している点」や「幅広い分野を学修することができる農学部のカリキュラム体制」に魅力を感じるという声が多く上がった。他にも、「阿見キャンパスと附属国際フィールド農学センターが隣接している」という茨城大学農学部ならではの特徴に魅力を感じているという学生もいた。

また、「農学部で行われている研究や学生の大学生活を学外に向けて発信してはどうか」「水戸キャンパスをはじめとする他学部の学生との交流機会を設けるようにしてはどうか」など、農学部の魅力をさらに向上させるための意見も集まった。

およそ1時間半に及ぶ意見交換後、太田寛行学長は「とても良い懇談会だった。今回出た意見をどのように今後に生かしていくか考えていきたい。留学をはじめとする茨城大学農学部が持つ魅力を学内にも広げ、大学全体が魅力的な場所になっていくようにしたい」と総括した。



7月30日 工学部と日立製作所が包括連携協力協定

本学工学部と株式会社日立製作所は7月30日、人材育成や共創活動により日立市を中心とした地域課題の解決ならびに地域活性化に寄与することを目的とした、包括的な連携協力に関する協定を締結した。両者での協定締結は今回が初めて。

日立市にキャンパスを構える工学部は、地元貢献する人材育成を重要な役割と捉え、卒業生・大学院修了生がエンジニアとして茨城県内で活躍するというキャリアパスを積極的に支援している。また、日立製作所は、創業の地である日立市に、日立グループのOT(制御・運用技術)・IT・プロダクトを支える主要な事業所や研究開発の拠点を多数有している。

工学部のルーツ校である多賀高等工業学校の創設には、日立製作所の創業者である小平浪平氏が深く関わっており、両者の間ではこれまでも人材育成や共同研究などの取り組みを進めていた。

今回の協定締結により、関係をさらに強化し、地域の発展を支える理工系高度人材の育成と地域の課題解決に向けた共創の取り組みを推進する。

締結式は小平浪平氏の名を冠した「小平記念ホール」（茨城大学日立キャンパス）にて開催され、本学の乾正知工学部長と日立製作所の佐野豊ひたち協創プロジェクト推進本部長が協定書にサイン。乾工学部長は「この連携を地域の未来を変える新技術誕生につなげたい」と話した。工学部で取り組んでいる気候変動対策についても触れ、「日立製作所とともにこの困難な問題の解決にも取り組んでいきたい」と意気込んだ。佐野本部長は「単なる地域貢献だけでなく、(将来の事業の種を育てることも見据えて)実践する枠組みとして今回の協定を生かしていきたい」と語った。



令和 7 年 8 月

8 月 5 日 水戸市とふるさと納税を活用した大学支援に関する覚書を締結

8 月 5 日、ふるさと納税を活用した大学支援に関する覚書を水戸市と締結した。水戸市がふるさと納税を活用して大学支援への寄附を募り、大学の学生への支援や修学環境の改善、地域振興に関する事業等に活用できる。

本学は、大学の将来を見据え、財源の見直しの再検討を行うとともに、外部資金・自己財源確保のため茨城大学基金を創設し、寄附募集を行っている。今回の覚書締結により、水戸市へのふるさと納税の仕組みを通じて本学への支援が可能となった。水戸市へのふるさと納税を行う際、「茨城大学への支援」を選択すれば、本学の活動への支援ができる。

締結式で、水戸市の高橋靖市長は「大変意義深い覚書を締結できた。誰しも母校愛はあると思うが、自分の生活が苦しいと寄附するのも難しい。ふるさと納税を活用することで、自分の思いを表しやすくなるし、母校に貢献できる達成感・充実感にもつながる」とあいさつ。太田寛行学長は、イバダイ・ビジョン 2030 で「地域と世界の結節点となり、市民と連携した活力ある地域社会の形成」とするビジョンを掲げていることを踏まえ、「(覚書の締結は)地域の皆さまから茨城大学を応援していただけることを示すもので、教職員・学生の励みになる」と謝意を伝えた。



8月30日 遊べる学べるイベントデー「IBADAY」初開催 地域の皆さん向けにキャンパスを開放

本学では、地域住民が気軽にキャンパスに足を運び、学んだり遊んだりできるイベント「IBADAY（イバデイ）」を新たにスタートした。初回は8月30日、水戸キャンパスで開催。本学の旬な研究・教育を体験できる講座・ワークショップ企画「土曜アカデミー」や、大学説明会、1冊の本を手にとるおしゃべり会「IBADAY BOOK CAFE」のほか、学生が企画・運営する「1日レポーター体験」「謎解き」などが行われた。

茨城県内外から高校生や家族連れなど約300人が来場。「大学生活や学びを想像することができた」「ニュースで見ていることを深く知れた」「新たな発見・学びがあった」などの声が聞かれた。

今後も3か月に1回を目安に実施していく方針。学外のステークホルダーとの共創の取り組みの実験の場としても活用したい考えだ。



令和 7 年 9 月

9 月 12 日・13 日 アカデミック・アドバイザー養成講座及び教務事務の研修に全国の大学から 79 人が参加

9 月 12 日・13 日の 2 日間、水戸キャンパスにおいて、「アカデミック・アドバイザー養成講座」及び「教務事務担当者講習会」が並行して行われた。全国の大学から教務やアカデミック・アドバイザーに関わる教職員が集まり学びを深めた。

この研修は、愛媛大学教育企画室が運営する教職員能力開発拠点事業が主催し、茨城大学教学イノベーション機構と日本アカデミック・アドバイザー協会が共催。本学が愛媛大学にオファーをして実現したもの。



学修者本位の教育に転換する上では、学修上の困難や進路に関する相談など学生固有のニーズや状況を総合的に捉えて自律的な成長を導く「アカデミック・アドバイザー」の活躍が期待されている。今回の養成講座には、アカデミック・アドバイザーの業務に関わっている教職員 33 人が参加し、その背景や意義、カリキュラムとの関係、学生支援におけるポイント、支援者の育成といったテーマについて学んだ。

9 月 22 日 理系女子をどう増やすか？～研究者へのキャリアパス支援に向けた FD を開催～

9 月 22 日、ダイバーシティ推進室は、教職員向け FD「理系女子をどう増やすか？」を対面・オンライン併用で開催した。

冒頭、佐藤裕紀子ダイバーシティ推進室長は、日本における理系女子学生や本学における理系女性教員の割合の低さに触れ、少子化時代における多様な人材確保の観点から、本テーマに関する議論の重要性を述べた。

FD は 3 部で構成され、第 1 部では、同大乾正知工学部長らが、JST「女子中高生の理系進路選択支援プロジェクト」に基づく 2 年間の取組を報告した。また、助成終了後も地元企業と連携し、理系進路支援活動が継続されていることが紹介された。

第 2 部では、工学部の女子学生 4 名によるクロストークが行われた。「理系に進む面白さ」や「就職への期待」などの工学部志望理由のほか、「保護者の反対」「教員の後押し」といった進路決定時の

実体験が共有された。

第3部の各学部長及び学環長間の議論では、ロールモデルの不足や保護者の理解、社会の無意識のバイアスといった課題が挙げられた。また、研究者を目指した博士課程進学を支援するため、修了後のキャリアの見える化も必要との意見が出された。

最後に菊池あしな理事（ダイバーシティ・国際・SDGs 担当）は、「このような議論の場がアンコンシャスバイアスの解消につながる」と述べた。本FDを通じ、理系女子のキャリア形成を支える学内外の取組と課題が共有され、今後の継続的な支援の必要性が確認された。



令和7年10月

10月9日 学生が感じる<工学部の魅力>とは？—令和7年度「学長と学生の懇談会 in 工学部」開催

10月9日、日立キャンパスにて「学長と学生の懇談会 in 工学部」を開催した。太田寛行学長をはじめとする教職員、工学部各学科2～4年生8人が日立キャンパスの日立建機 LANDCROS LOUNGE に集まり、学生一人ひとりが工学部の魅力を語った。

懇談会では「あなたが感じる“工学部”の魅力とは？」というテーマが設けられ、進路実現、カリキュラム編成など多種多様な観点から意見が述べられた。

懇談会の冒頭では、物質科学工学科4年の川口守李さんから「私が考える工学部の魅力」と題して話題提起を行った。その後は杉本憲子スチューデントサクセスセンター（SSC）スチューデントライフサポート室長の司会の下、学生一人ひとりが工学部の魅力について自由に述べ、「大学院進学を見据えたカリキュラム編成」や「県内工業系企業の就職に強い点」に魅力を感じるという声が多く上がった。

1時間半にわたって議論が交わされた後、太田学長は「教員側が聴きたい部分について学生に直接聞くことが出来て良かった。やはり、対面で開催することが大切だと感じる。学生が成長することが

大学の成長につながるため、引き続き協力してほしい。」と懇談会を締め括った。



令和7年11月

11月5日～9日 大学図書館で企画展「頼房-水戸藩のはじまり-」を開催

水戸キャンパスの図書館本館は、2025年度第2回企画展として「頼房-水戸藩のはじまり-」を11月5日から9日に開催した。

図書館本館では茨城県域の歴史や文化に関わる重要な資料を「地域資料」として収集している。本企画展では新収蔵資料となる水戸藩初代藩主徳川頼房の書状をはじめ、近世前期の大名などの書判（花押）を集めた「花押集」や関連資料を展示した。徳川頼房の書状は2通展示され、将軍家光の供として上洛する際と思われるものと、江戸参府にあたっての道橋整備の礼を伝えるもので、それぞれ「水戸宰相頼房」と「水戸中納言頼房」の名と花押が据えられている。花押集は教科書などでも名前を見かける著名な大名の花押が多数収録されており、どの花押が好みか来場者が投票できるアンケートコーナーも設けられた。

11月9日には、土曜アカデミー特別編として、茨城県立神栖高等学校教諭の生井雅久氏を講師に、展示資料を詳細に解説するギャラリートークを開催した。学園祭「茨苑祭」当日ということあり、非常に多くの来場者が講師の解説を聞きながら熱心に展示資料を観覧していた。

また同時開催の展示として10月31日から11月22日まで、水戸駅近くの常陽藝文センターにて、本企画展の展示資料のほか、茨城大学図書館で近年新規に収集した貴重資料を紹介するパネル展も開催し、本企画展と併せてより幅広い所蔵資料の紹介を行った。



11月16日 映画『ペリリュウ ―楽園のゲルニカー』試写イベント開催 ―陸軍基地跡につくられた茨大水戸キャンパスで戦争と平和を考える

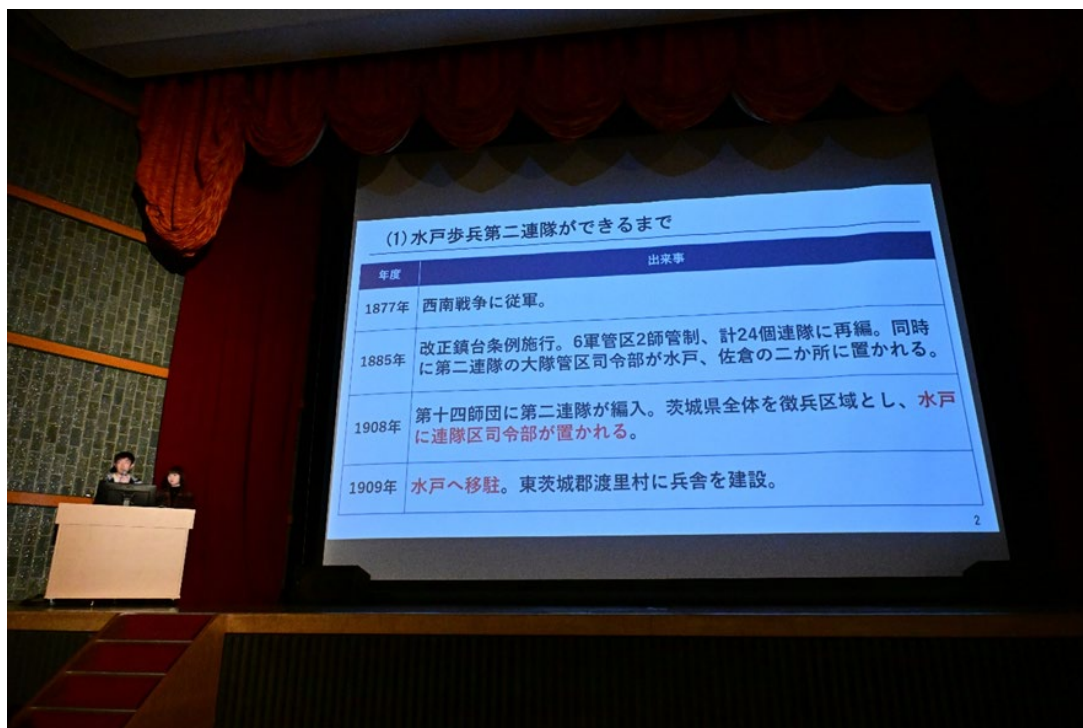
11月16日、戦後80年の節目に、学生や地域住民が戦争への理解を深め、平和について考える機会として、太平洋戦争におけるペリリュウ島の戦いを描いた映画『ペリリュウ ―楽園のゲルニカー』（12月5日公開、久慈悟郎監督）の試写会・ティーチインイベントを東映株式会社との共催で行った。



水戸キャンパスは、陸軍水戸歩兵第二連隊の兵営跡地につくられた。同連隊は、太平洋戦争末期、パラオのペリリュウ島に上陸し、多くの兵士が戦死した。

本学では、学生や地域住民の皆さんがかつて陸軍基地だったキャンパスの歴史に理解を深め、戦争や平和について考える機会を創出すべく、本イベントを東映株式会社と共催。本学学生のほか、近隣の中学校や高校の学生など約400人が来場した。

映画上映に先立ち、陸軍水戸歩兵第二連隊にまつわる歴史などを調査した学生チームがその成果を報告。「水戸歩兵二連隊ができるまで―その後の市民生活への影響―」について発表した学生は、同連隊が1909（明治42）年に千葉・佐倉から水戸に転営した経緯について、「軍隊組織の持つ経済力による地域社会の発展を期待し各地で誘致運動が活発化した流れだった」と説明。工兵の訓練可能な那珂川が近くにあること、平地林が歩兵の練兵場に適していることなどから堀原付近が選ばれ、周辺が軍隊城下町として発展していった歴史を解説した。



後半は原作者の武田一義さんと主人公・田丸均役の俳優・板垣李光人さんが登壇し、映画の裏側や込めた思いを語った。

11月26日 次期学長候補者 佐川泰弘理事・副学長（総括・財務・企画・評価）が記者会見

11月26日、次期学長候補者として選出された佐川泰弘理事・副学長（総括・財務・企画・評価）が記者会見に出席し、「将来を見越した改善、改革の先頭に立ちたい」と述べ、所信を表明した。

教育・研究の両面で「茨大らしさ」を示していける土台・潜在力がある」と茨城大学の現状を捉えたうえで、立候補した理由を「制度のことや学校全体のことを理解して、その花を開かせていけるのは自分だろう」と説明した。

また、基本スタンスとして①教員が存分に研究に取り組める環境づくり、②多様性の尊重、③視野を広げた戦略的な取り組み、④学内コミュニケーション強化—の4点を掲げ、大学運営における主要な領域ごとに重点テーマを示した。

■教育改革：10年後の学生を想定し「ここで学びたい」「成長を実感できる」大学に

■研究推進：教員が存分に研究に組み、研究「ブランド」が見える大学に

■ステークホルダーとの連携：互いの利益や持続可能性を高めるための地域社会や国内外の大学等との連携強化

■財政・組織運営：財政基盤を安定させ、レジリエントな管理運営組織に

最後は、財政難などをはじめとする国立大学の困難に触れつつ、「悲観することなく、10年、15年先の将来を見越して、多方面にわたる改善、改革の先頭に立ち全力を尽くしたい」とまとめた。



令和 7 年 1 2 月

12 月 2 日 土木技術に関わる産学官の関係者が研究交流 身近な工事の事例などを報告

12 月 2 日、日立キャンパスにて、県内の土木事業や研究に取り組む大学、行政、産業界のメンバーが一堂に会し、最新の土木工事や調査の事例を報告するイベントが、茨城大学工学部附属都市・地域デザイン教育研究センターと土木学会茨城会の主催により初めて行われた。産学官それぞれの関係者に学生を含む約 200 名が参加した。

発表会は、茨城県の土木行政の概要を紹介する基調講演に始まり、その後は行政、産業界、大学のそれぞれの代表者が最新の実践や研究を紹介するという構成で行われた。

土木技術の研鑽と関係者間の信頼の構築は、私たちの生活を支えるインフラの安全に直結するものである。桑原教授は「今後も年 1～2 回のペースで実施していく予定。産学官の壁を超えて勉強する場所をつくっていきたいです」と意気込んだ。



12月17日 令和7年度前学期成績優秀学生表彰式を開催

12月17日、令和7年度前学期成績優秀学生表彰式が開かれ、学部4年次と大学院1年次（修士課程／博士前期課程／専門職学位課程）の学生計74名が表彰された。表彰式は水戸・日立・阿見それぞれの会場をオンラインでつなぐ形で実施した。

太田寛行学長は祝辞で、地球・地域環境共創機構（GLEC）が今年度の気候変動アクション環境大臣表彰を受賞したことに触れ「励んできたことがきちんと評価され、茨城大学の存在価値が認められたとてもうれしい出来事でした。励んできた学業が認められたことは、皆さんにとっても同様にうれしいことだと思います」と話した。「これから社会に出てからも、何に打ち込み、どう認められるかということはずっと続きます。しかし常に良い評価を受けるとは限りません。そういう時でも、這い上がって立ち向かっていく心を忘れないでいてほしいと思います」とエールを送った。

受賞者を代表して、関一樹さん（理学部4年）と若林怜音さん（理工学研究科博士前期課程1年）が謝辞を述べた。

関さんは「天気や大気現象のメカニズムに興味を持ち、それを学ぶことができる茨城大学に入学しました。目標としていた気象学研究室に配属され、研究活動を進めることができています。卒業後は気象の現場で業務に携わる予定です。茨城大学で培った知識と経験を活かし、社会を支える一員として責任をもって職務に取り組んでまいります」と抱負を語った。

若林さんは「都市計画について学びたい一心で茨城大学に入学しました。先生方は授業の中で、知識だけでなく、実際の現場ではどうかという実践的な視点や、技術者としての姿勢を教えてくださいました。茨城大学で学んだことを頭に入れておくだけでなく、この知識を使えば社会はどう良くなるのか、人々の暮らしをどう支えられるのかを日々問い続けながら、いつか次の世代の社会の形を作っていけるような人間になりたいです」と意気込んだ。



12月25日 地域未来共創学環、初の「プレコーオペ実習」報告会を開催

地域未来共創学環は12月25日、第一期生（2年生）によるプレコーオペ実習報告会を開いた。学生たちは、夏季休業期間中に企業・団体や自治体で就業体験して得た学びやその成果を、教職員や実習先の関係者、後輩たちに向けて発表した。

地域未来共創学環は、昨年度に開設した学部相当の教育組織。人文社会科学部・工学部・農学部との関係による学部等連係課程で、全員が「ビジネス」「データサイエンス」「ソーシャル・アントレプレナーシップ」を学ぶという分野・文理横断型のカリキュラムと、企業・自治体等で長期間にわたり有給の実習を行う「コーオペ実習」を特徴としている。

「プレコーオペ実習」は、2年次夏季休業期間中に協力企業・自治体等で実施する無給の就業体験。本格的な長期有給実習である「コーオペ実習Ⅰ」の前年度に学外で約2週間の実習を行う。実社会を体験し「働くこととは何か」について理解を深めることが目的としている。今年度初めて実施され、2年生41人が計33の企業・自治体等で就業体験した。

報告会では、実習内容の紹介にとどまらず、現場で得た経験や学びを発表。大学での学修との結びつきや、来年度プレコーオペ実習を実施する後輩たちへのアドバイスを伝える姿も見られた。

全学生の報告が終わり、福与徳文学環長は「学生のみなさんへのアンケートでは満足度が高いという回答を得ていたのですが、今日のプレゼンを聞いて納得した。実習先の方々にとっても初めての試みで大変だったかと思う。感謝したい」と、会場の学生や実習先の方々に向けてあいさつした。



茨城大学五浦美術文化研究所 70 周年記念事業として六角堂などを修繕

五浦美術文化研究所は、設立 70 周年を記念し、六角堂や旧天心邸入口に位置する「長屋門」の修繕などの事業を順次進め始めた。

その一つが、六角堂建屋の「ベンガラ」彩色。六角堂は 2011 年の東日本大震災における津波によって太平洋へ流出し、翌 2012 年に創建当時(1905 年)の姿に再建された。しかし現在では建屋の木壁は塩害や経年による劣化が進んでいる。そのため、創建時に使用されたと考えられる天然顔料「ベンガラ」による塗装を行うこととした。資金は茨城大学が開発しサザコーヒーが商品化した「五浦コーヒー」の売上を活用する。

さらに、「長屋門」屋根の葺き替えのためのクラウドファンディングにも挑戦。運営費交付金の減少や物価高などによる財務状況の厳しさから、最低限の安全確保のための予算確保で精一杯な現状

で、クラウドファンディングへの挑戦を決めた。最終的には 270 名の皆さまより、720 万円のご支援をいただくことができた。

同研究所は、天心ゆかりの文化財を守りながら、展覧会や催しを通してその魅力を伝える活動が続けており、片口直樹所長は「岡倉天心が描いたヴィジョンを視覚的、体験的に感じていただくためにも、天心遺跡は当時の姿を継承していく必要がある」と話している。



令和 8 年 1 月

1 月 6 日 学長年頭あいさつ

太田寛行学長から全教職員へ向け、年頭のあいさつをオンラインで配信した。

みなさん、あけましておめでとうございます。

茨城は大きな災害もなく、穏やかに新年がスタートしたと思います。しかし、本学の年頭挨拶の直前に、島根県東部を震源とする最大震度 5 強の地震が発生し、地域によっては平穏な始まりとはいえませんでした。また、災害からの復旧・復興が遅れ、苦境にあえいでいる人たちが依然として多くいらっしゃいます。一刻も早く平穏な生活に戻れるよう、祈るばかりです。

昨年は、戦後 80 年の年でした。その節目の年に、誰もが、これから先も平和が長く続くことを願ったはずです。

もう一つ、昨年は、戦後に起こった大規模災害である“阪神・淡路大震災”から 30 年という節目の年でもありました。あの大地震をきっかけに、私たちは助け合いのボランティアを組織するようになり、災禍に助け合って、共に苦難を乗り越える心を培ってきました。その後の、度重なる災害を経験して、

苦境は繰り返されるけれど、その心は挫けることなく、むしろ強まってきたと感じています。

また、昨年は、クマ被害が顕著となり、人間の世界だけでなく、生き物すべての世界で何かが変わりつつあることを実感した年でした。その背景には、気候変動や人が関わる森林環境の変化があるはずです。このような状況の克服に向かって、教育研究を通して、真っ先に立ち向かうのは、大学です。この意味で、本学が体系化してきた「総合気候変動科学」の教育研究をさらに推進する必要があります。

海外をみれば、ドナルド・トランプ氏が2期目の大統領に就任し、ある日本の政治学者は、「2026年以降、世界は米国なき世界秩序の在り方を模索していく必要に迫られるでしょう。」と語りました。事実、年明け直後に、ベネズエラの首都への攻撃や、大統領夫妻の拘束といった、衝撃的な出来事が報じられ、国際秩序の悪化が懸念されています。

このような世界情勢のなかで、私たちは互いに助け合って生きることが、人間の本質であることを再確認し、本学が交流し連携してきた、海外の大学との絆を一層強め、持続可能な地球環境について、国を越えて学生たちと一緒に考えていくことが必要でしょう。

国内に目を向けると、特に、大学をめぐる状況については、昨年、「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～」(答申)が公表され、人口減少社会のなかでの大学の在り方が示されました。その答申の中の「教育研究の“質”の更なる高度化」で記載されるポイントは、①学修者本位の教育の更なる推進、②多様な学生の受入れ促進、③大学院教育の改革、④研究力の強化、⑤情報公表の推進です。

本学は、2016年から教育の質保証の取組みをスタートさせました。さらに一昨年からは、「スチューデントサクセス」を掲げて「学生中心の大学」をめざしています。このような取組は、“知の総和”答申の「学修者本位の教育の更なる推進」に先行するものだと思います。

今年は、その“知の総和”答申を踏まえて、私たちが取り組んでいる“イバダイ・ビジョン 2030”のアクションの内容と進捗状況を確認することが必要です。

そこで、その確認の場の一つとして、“学長の最終業績評価に係るプレゼンテーション”の機会を考えました。通常は学長の業績評価を行う「学長選考・監察会議」に対して毎年度実施されていましたが、この発表会は学内公開で行います。発表会は2月24日(火)の10時から図書館ライブラリーホールで、オンライン併用にて開催します。詳細は、学生たちを含めて皆さんに、追ってご案内します。最後になりましたが、今年も、皆様の教育研究のさらなるご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

1月9日～ サテライトキャンパスを学習スペースとして高校生に開放「高校生アワー」

JR 水戸駅近くのサテライトキャンパス「水戸駅南サテライト」を高校生の学習スペースとして開放する「高校生アワー」を開始した。開催は毎月第2・4金曜夕方～夜間、利用料は無料。12月のプレオープンを経て、1月に本格オープンした。

入試広報強化と水戸駅南サテライトの利活用促進が目的。高校生を始めとする受験者は、水戸市内では市民会館や図書館などの無料スペースを学習に利用しているが満席になることも多く、夕方～夜間に利用できる駅近の学習スペースを提供することで、大学としての親近感やブランドイメージの向上を図りたい考え。

プレオープン時には、大学・学部等のパンフレットや選抜要項を設置したほか、入試過去問の閲覧スペースを用意し、大学生による学習相談なども行った。利用者からは「利用している学習スペース

が混んでいるので開室日が増えるとありがたい」「過去問があるのがよい」等の意見が寄せられた。



1月 海外大学とのクロスアポイントメントを初めて実施

本学では、海外大学との間では初となるクロスアポイントメントを実施し、インドネシアのガジャ・マダ大学（Universitas Gadjah Mada : UGM）の Ani Widiastuti 教授を応用生物学野教授として受け入れた。期間は 2025 年 1 月から 1 年間で、農学部および農学研究科において授業や共同研究を担当する。アニ教授は植物病理学および植物免疫が専門で、国際的な研究業績を有している。

両大学は 2000 年に農学部間、2010 年に大学間で交流協定を締結し、教育・研究の両面で連携を深めてきた。茨城大学はガジャ・マダ大学から継続的に留学生を受け入れており、アニ教授もその一人として東京農工大学連合農学研究科博士課程（茨城大学設置）で学位を取得している。

1 月 13 日には学長室で懇談が行われ、両大学の長年の連携の歩みについて話題が及んだ。アニ教授は、「卒業生として、茨城大学に研究面などで貢献したい。専門である植物病理学や免疫についての知識や技術を教えたい」と抱負を述べた。



令和8年2月

2月17日～20日 日本画家・木村武山展を図書館展示室で開催-五浦美術文化研究所所蔵《小春》など紹介

2月17日～20日、茨城県の笠間出身で、岡倉天心が興した日本美術院に参加して五浦でも画業に励んだ日本画家・木村武山（1876-1942）の作品を紹介する展覧会が、水戸キャンパス図書館本館1階展示室で開催された。代表作のひとつでもある本学五浦美術文化研究所所蔵の大作屏風《小春》などが展示された。

その他、晩年に描かれた《秋景》をはじめとする軸装の花鳥画や、武山が得意とした仏画（《聖観音》）、さらに東京美術学校時代に武山が着用していた校服も展示し、特別に製作した小冊子も配付した。

この展覧会は、本学五浦美術文化研究所の70周年記念事業のフィナーレを飾る企画で、あわせて、茨城県天心記念五浦美術館においても「生誕150年記念 木村武山展」が開催された。





2月27日 原子力研究の成果を社会とつなげるには？—サイエンスアイデアソン in JAEA

研究成果の社会実装や大学発スタートアップの創出が重視される中、その可能性を原子力研究の現場から探る「サイエンスアイデアソン」が2月27日、日本原子力研究開発機構（JAEA）で開催された。基調講演やワークショップを通して、中性子線利用や核融合研究などから生まれる成果の活用可能性について、多様な立場の参加者が意見を交わした。

大学での教育や研究の成果を活かした革新的で成長が見込まれる企業の創出が期待される中、本学では、GTIE つくば拠点の技術シーズからの大学発スタートアップを創出する取り組みを行っている。今回は原子力分野における研究活動の現場に立ち回り、そこで日々蓄積されている技術、知見、研究環境を出発点として議論を行った。

前半は、文部科学省科学技術・学術政策局の馬場大輔参事官（研究環境担当）が「科学の再興～研究基盤の刷新、J-PARC～」と題して基調講演を行ったほか、開催地である東海村からも萩谷浩康副村長が登壇し村の産業振興ビジョンなどについて講演した。

ワークショップでは参加者がグループに分かれ、研究者や支援者、企業関係者らが立場を超えて意見を交わし、原子力研究から生まれる技術を社会につなげる道筋について考えた。



令和 8 年 3 月

3 月 2 日 令和 7 年度後学期成績優秀学生表彰式を開催

3 月 2 日、令和 7 年度後学期成績優秀学生表彰式が開かれ、学部・学環 2 年次と大学院 2 年次（修士課程／博士前期課程／専門職学位課程）の学生計 73 名が表彰された。表彰式は水戸・日立・阿見それぞれの会場をオンラインでつなぐ形で実施した。

太田寛行学長は祝意を述べるとともに、茨城大学のディプロマポリシー（DP）である「世界の俯瞰的理解」をテーマに話した。揺れ動く世界を生きていくために必要なことだとし、その意図を「世界を点ではなく関係として見よう、ということ。自分事とするならば、自分の位置を相対化して、他社との関係で捉え直す。世界は多様で、その多様性を前提に、他者とどう共に生きるか。そしてその時、自分の利益ではなく全体の調和を目指すことになるが、それも含んでいる」と説明した。

受賞者を代表して、林知那さん（農学部 2 年）と高橋凌磨さん（理工学研究科博士前期課程 2 年）が謝辞を述べた。

林さんは「入学した動機は科学的な視点から人々の生活を豊かにしたいと考えたことです。大学生活では生命科学や食品化学に関する専門知識を学ぶだけでなく、課題や実験を通して、物事を論理的に考える力や、すぐには結果が出ないものに対してあきらめずやり抜く力を身に付けられたと感じています。今後は留学を通して国際的な視野や語学能力を磨き、大学院へ進学し、より専門的な研究に取り組みたいと考えています」と抱負を語った。

高橋さんは「幼いころから、身の回りの電子機器を分解するのが大好きで、デバイスの内部構造に興味がありました。茨城大学に入学してからは、自らの手で暮らしを支えるデバイスを開発したいと、なりたい自分を思い描いて取り組んできました。その思いがナノエレクトロニクス分野の研究につながりました。答えのない問いに対し、試行錯誤を繰り返す日々でしたが、こうしたプロセスは、社会において非常に重要な力であると信じています。茨城大学、大学院での 6 年間で培った課題解決能力や研究開発能力は今後の私を支える確かな基盤となると認識しています」と振り返った。



3月4日 令和7年度学生表彰式を開催

3月4日、「令和7年度学生表彰式」を開催した。学生表彰は、学術や教育、課外活動、ボランティア活動などの分野において卓越した業績等を挙げた学生を表彰するもので、今回は45名の個人と4つの団体が表彰状を授与された。

表彰式では、3つの各分野を代表して、鮎澤晋之介さん（理工学研究科博士前期課程1年）、萩原拓人さん（放送研究会／工学部3年）、阿部 佐紀さん（学びと交流の秘密基地／人文社会科学部3年）が表彰状を受け取った。

表彰式で太田寛行学長は、さまざまな分野における学生の活躍は、個人だけでなく大学としてもありがたいとして謝意を示した。その上で、大学生・大学院生だけでなく、教育学部附属学校園の子どもたちもコンテストなどで多くの賞を受賞していることに触れた。

表彰学生を代表して登壇した鮎澤晋之介さんは、自身の学会発表の成果を紹介した上で、「自分ひとりの力ではなく先生、研究室の同期、学習環境を整えてくださっている大学関係者の支えがなければ達成できませんでした」「この研究を通して大学院で培われた探究心や研究姿勢を胸に、社会に出ても社会貢献ができる人材になりたいと考えております」と述べた。



3月6日 附属特別支援学校が教育学部棟で卒業式

3月6日、教育学部附属特別支援学校の卒業式が執り行われた。現在、校舎の改修中につき、特別に大学の教育学部棟で開催。小学・中学・高等部の卒業生計12人が出席し、在校生も見守った。卒業生たちは自信に満ちた表情で式に臨んだ。

卒業生は名前を呼ばれると、一人ひとりが壇上に上がり、吉野聡校長から卒業証書を受け取った。式終盤には、「児童生徒メッセージ」が行われた。小・中学部では在校生から卒業生への感謝やこれまでの学校生活を振り返る映像が流れた。高等部では2年生の代表生徒が送辞を述べた。「卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。先輩方と一緒にすごせて、とても楽しかったです」と始まり、「思いやりがある」「みんなに優しい」「走るのが速い」などと、高等部の卒業生の良いところを一人ひとりの目を見て伝えた。

答辞は3年生の代表生徒が、高等部入学時や修学旅行、仕事を体験する現場実習、ヤギとのふれあい体験、秋祭り、運動会などの思い出を振り返り、「私たちはこの学校が大好きです」「後輩のみなさん、仲間を大切に楽しい思い出を作ってください」と話した。

卒業生たちは退場後、最後の指導を受け、学校生活を締めくくった。



3月11日 津波被害から15年、ベンガラの塗装がよみがえった五浦・六角堂―塗装費用寄附のサザコーヒーの鈴木社長へ感謝状を贈呈

再建前の六角堂が津波で流失した東日本大震災から15年が経った2026年3月11日、ベンガラの塗装費用を寄附いただいた株式会社サザコーヒーから、鈴木太郎代表取締役社長らを五浦へお招きし、太田寛行学長より感謝状を贈呈した。

太田学長は、「天心が残してくれたものを私たちは受け継いできました。街道から少し寄り道したところに、いろいろな気付きを与えてくれる素晴らしいものがあるということ、この地で天心と六角堂が教えてくれています。そうした価値をサザコーヒーさんとともに作っていけるのは幸せなことです」と謝意を示した。

鈴木社長は、本学キャンパス内での出店や「五浦コヒー」開発の取組みを振り返りながら、「岡倉天心さんはいろんな国を回って、お茶を通じて文化を発信しました。僕たちはコーヒーを通じてそれをやっているの、五浦での取組みの仲間に入れてもらえることを嬉しく思っています」と語った。

感謝状贈呈式の最後に、五浦美術文化研究所の片口直樹所長は、「歴史の中に未来の秘密が隠れている」という岡倉天心の言葉を紹介し、「これまでの歴史を語り、これからの未来を照らす赤い灯台として、六角堂があり続けることを願っています」と締めくくった。



3月24日 令和7年度卒業式・学位記伝達式を挙

3月24日、茨城大学令和7年度卒業式・学位記伝達式が、水戸市民会館グロービスホール（大ホール）にて挙



【学長告辞】

本日、卒業式・修了式を迎えた 2,042 名の皆さん、誠におめでとうございます。

皆さんのこれまでの学業と研究に向かう努力に、心から敬意を表します。また、皆さんを支えてこられたご家族や友人の方々にも、心からの感謝とお祝いを申し上げます。

卒業・修了は学位授与の式典でもあります。本日は、学位授与方針、すなわちディプロマポリシーについて、改めて、皆さんと共に振り返ってみたいと思います。なぜなら、本学のディプロマポリシーには、本学の独自性を示す要素・能力が含まれているからです。

それは、第一番目に掲げられている「世界の俯瞰的理解」であり、自然環境、国際社会、人間と多様な文化に対する幅広い知識を基盤として、世界を俯瞰的に理解する力です。他大学のディプロマポリシーをみると、この「世界の俯瞰的理解」を明確に掲げている大学はほとんどありません。したが

って、本学には、その能力をディプロマポリシーへ掲げるに至った歴史的な背景があるのだと思います。本日は、そのことについて、私なりの解釈を皆さんと共有してみたいと思います。

まず、皆さんは、本学の「五浦美術文化研究所」を訪ねたことがあるでしょうか？

この研究所の歴史を辿ってみると、その成り立ちは、近代日本画を代表する画家であり、日本美術院を率いた横山大観の申し出から始まったことが分かります。横山大観は、岡倉天心を顕彰する「天心偉績顕彰会」の理事長として、天心ゆかりの旧天心邸・六角堂・長屋門の寄贈を本学に申し出たのです。本学はこの申し出を受けて、1955年に「五浦美術文化研究所」を設立しました。

研究所の所在は、その名前の通り、茨城県北部、五浦海岸です。岡倉天心は、その海岸の、ごつごつとした岩が海面から顔を出している景色をこよなく愛したそうです。そのような景色の波打ち際に静かに佇む“六角堂”があります。

背に六角堂を感じながら太平洋を望むと、波の音に耳を澄ませ、窓越しに揺らぐ水平線や波の形の変化を楽しんで眺めている天心の気配が、時空を超えて伝わってくるように感じられます。六角堂の大きな窓には天心がアメリカで調達した吹き板ガラスが使われており、そのわずかな厚みの違いによって、水平線の見え方が微妙に揺らいで見えるのです。

六角堂の中では、水平線は常に真っ直ぐな線ではないのです。その体験からすれば、対象と自分の目の間に何があるかによって、見え方が変わるという哲学的な思索も生まれるでしょう。

岡倉天心は、インド、中国を旅した後、五浦に居を構えながら、ボストン美術館と五浦を行き来する生活を10年にわたって続けました。私は五浦を訪ねた時、六角堂は、天心がたどり着いた「世界の俯瞰的理解」の象徴だと感じました。天心が突き詰めてたどり着いた「東洋の美と文化」に対する俯瞰的理解を、世界に発信しようとしたのではないかと思います。

そして、六角堂の前に広がる太平洋の向こう側にアメリカがあり、天心が勤務したボストン美術館で表現されている西洋の美と文化があるのと同じように、東洋のものを表現することが、この断崖の上に設計した意図ではないかと、私は想像しています。

人間は、学ぶことを求めながら、その結果として、学びで得たものを表現したいと切望する生き物です。その学びによって得たものが「世界の俯瞰的理解」であり、大学では、その形が、学位論文や著作、あるいは芸術作品になると思います。

六角堂をめぐるのは、もう一つの物語があります。2011年3月11日の東日本大震災の津波によって流失したことです。現在の六角堂は、翌2012年に、世界中から寄せられた多くの支援によって、創建当時の姿に再建されたものです。当時、その再建は、辛い思いを抱きながらも、復興へ歩み出そうという人々の勇気のシンボルでした。あれから十数年経ち、建物のベンガラ色は時の流れとともに、色褪せましたが、今年の3月11日には、再塗装が完了し、ベンガラ色が鮮やかによみがえりました。天心の声が再び聞こえてきそうな場所として、そして、辛い思いを噛みしめながらも、歩み続ける誓いの場にもなったのです。

五浦の地から内陸に向かえば、交通量の多い国道6号線があり、常磐線の電車が走っています。そうした幹線を行き来することが、日常の状態とすれば、そこから少し逸れて、五浦の天心偉績を訪ねることは、普段とは違う世界に触れることです。そこで、何かを感じて、気づきを得たならば、そのような「寄り道」は、とても大事なものです。

おそらく、自分が変わろう、何か新しいことを始めよう、と思う切っ掛けは、幹線をまっしぐらに走

るような日常ではなく、普段の道から少し逸れて、想像しなかったような景色の中で、だれかと出会ったり、思いがけない人と語り合ったりするような瞬間に生まれるのではないのでしょうか。

その意味で、大学は、知識やスキル、技術を得る日常的な場だけではなく、今述べた“寄り道”が出来る場でもあります。そのような場とは、サークル活動、課外活動だけでなく、学外研修や、専門を越えて議論したことなど、皆さんたちが独自に活動し、様々に交流してきた経験そのものでもあります。

皆さんにとって、もちろん、私たち大学にとっても、「世界の俯瞰的理解」に終わりはありません。これからも究める道は続くでしょう。世界情勢が揺れ動いている時代だからこそ、私たちは学びを追究する心を持つこと、そして持ち続けることが、これまで以上に重要です。

これからの人生の中で、時には寄り道をしながら新しい景色に出会い、多くの様々な人と語り合う経験を重ねていってください。そして、もし歩みを振り返りたくなったときには、学生時代の様々な体験を思い出していただければ嬉しく思います。

以上で、茨城大学、令和7年度卒業式の告辞といたします。

本日は誠におめでとうございます。

令和8年3月24日
茨城大学長 太田寛行

